

# 大陸（北支）

## 山東省徳県部隊の勤務について

山梨県 柵 隆 一

私は山梨県東八郡右左口村（甲府市）中畑において大正十三（一九二四）年十二月二十二日出生、学歴は昭和十五（一九四〇）年三月、甲府簿記学校専修科を卒業しました。

昭和十八年壮丁検査を受け第一乙種合格、兵役は昭和十九年十二月一日、東部第六十三部隊に、北支派遣「衣第三〇四一部隊」要員として入営しました。数日して甲府駅で乗車、下関―釜山―山海関―徳県（山東省）に到着、昭和十九年十二月二十日から三カ月初年兵教育が山東省臨邑県であ

りました。

この教育終了後、引き続き昭和二十年四月から三カ月、済南駐屯第四十三軍羽山隊で無線の教育を受け、終了と同時に徳県原隊「至剛第一五七〇七部隊」に復帰、その後、山東省温県で共産八路軍の討伐に参加しました。部隊長は矢崎太郎大尉でした。

昭和二十年四月、至剛第一五七〇七部隊が編成され、同年八月十五日終戦となり、昭和二十一年一月一日、徳県の撤収のおおむね十カ月間、津浦沿線の広範囲にわたる治安警備のため、四六時中八路軍との対峙や、なかならず恩県においては、布施隊主力が、桑梓店においては税所隊分駐隊が、また稜県、平原においても警備隊本部が敵八路軍

の大部隊の襲撃を受けるなど、最悪の状態下であり、その救援作戦行動も意のごとくならず、部隊の人員、兵器の損耗も目立って深刻となる。

特に済南において武装解除後は丸腰の行軍で、それに大勢の現地引き揚げ邦人を同行しており、途中青島を目前にして高密部落での保安隊の暴行や略奪行為は目に余るものありて、敗戦の現実をいやと言うほど知らされた。

以上のように、私は私人として行動したことは僅少で、いつも隊の一員であったので体験を書くにも困惑するばかりである。たまたま所属隊の戦闘記録が冊子となって戦後配布されたものがあることから、これらを参考にして記すことにした。

昭和二十年十月十一日、中国側接収部隊が未着のまま、日本軍の武装を解除したことは米軍の越権行為であり、同時に対八路軍戦に未経験のためでもあって、これにより独立混成第九旅団地区の治安が一時混乱した。

八路軍は天津―済南の間の津浦線を各所で遮断

したため、国府軍の北支、満州進駐を遅延させる要因となった。国府軍の主力は中南支西方にあつたので、日本軍占領地域、特に北支への進駐が遅れた。済南には昭和二十年十一月ごろ、李延年將軍のみが空路進駐した。

それまでの間、日本軍が占拠地域にあつて、治安の維持に任じた役割は大きい。しかし日本軍が国共相克の渦中に巻き込まれ、八路軍からの武装解除を拒否したため、その攻撃を受け、損害を出した部隊が各所に生じた。

もともと受降主管は戦勝国の国軍であるから八路軍にはその資格なく、ただ日本軍の兵器、弾薬、馬匹、車両、通信機材などを手中にしたい一心からの行動で容認さるべきではなかった。

馬腰務拠点陣地の戦闘は昭和二十年八月十六日、指揮者川上軍曹ほか二十七人、八月十五日ごろから陣地の周囲に八百〜千人の八路軍が包囲して、不穩の形勢となり、翌十六日朝から総攻撃を受けたが、四百メートルに接近後は歩兵火器のみで応

戦し、敵に相当の損害を与えた。数日この抗戦が続いたが陣地を確保しえた。

八月十八日、中隊主力の出動により救出された。損害は負傷一人であった。

#### 八路軍による武装解除要求事件

昭和二十年八月二十日夕刻、八路軍の便衣隊の軍使（日本人）が徳県警備隊司令部を訪問、兵器の数量表を示し、武装解除を要求したが、これを拒否した。

#### 鉄道修理隊の作業掩護

津浦線は昭和二十年九月ごろから八路軍により破壊され不通となっていた。在徳県の大隊主力は同年十月以降、数次にわたり野戦鉄道第六中隊の一部による徳県―黄河崖の鉄道修理の作業掩護に出動したが、夜ごとの破壊が甚大のため、不成功に終わる。

#### 黄河崖、本家橋拠点の戦闘

黄河崖の金子兵長以下十六人は優勢なる八路軍の攻撃を受け壊滅、本家橋拠点は、交戦四時間、

神藤少尉以下四十四人は拠点を離脱して十月二十四日、平原に到着、損害は生死不明九人。

#### 崔家坊付近の戦闘

昭和二十年十月二十七日、独立歩兵第四十六大隊の神藤少尉以下四十四人、布施中尉以下三十五人は、第三百三十一連隊第二大隊長（乗上少佐）の指揮下にあつた。

布施中尉は少佐の命令により神藤小隊を原拠点に復帰支援のため、指揮班、二宮小隊、神藤小隊、計七十九人を指揮し、十月二十七日午前一時三十分、平原を出発し、六時三十分には頰河南岸に到達し、橋を渡ったところ、八路軍から「降伏して武器を渡すよう」要求された。

これを拒否して戦闘となり、交戦八時間、午後三時ごろに弾薬消耗し、中隊長は薄暮にいたるまで火力による持久戦は不可と判断、決心し、午後三時三十分ごろ、残る弾薬で集中射撃を実施し、突撃を敢行、敵の重囲を突破したが、中隊長以下多数の戦傷者、生死不明者を出した。

同日の夜になって平原を離脱し得たのは、川上軍曹以下七人、負傷者六人、計十三人であった。

翌朝、二宮少尉は単身平原を離脱した。損害は戦死、布施中尉以下十五人、負傷十人、生死不明三十五人であった。

#### 平原拠点の潰滅

独立警備歩兵第四十六大隊の沢本少尉以下百人は、昭和二十年十月二十七日、平原―禹城の中間地点の鉄道中継所の警備のため派遣されていたが、同夕刻、本部から中隊長以下の悲報に接し、急遽復帰、残存兵力百人をもって平原拠点の任務を継承した。そのころ、平原県城を準備していた国府軍と八路軍が戦闘をしたが、国府軍が敗走、同夜、八路軍に占拠された。

十一月一日、平原拠点に八路軍の軍使数人（日本人解放連盟）が沢本少尉に対して武装解除を要求し、拒否すれば攻撃する旨を伝達してきた。沢本少尉は停戦後の局地的な自衛戦闘を惹起した場合、圧倒的多数の八路軍により玉砕するは必然で

あり、抗命覚悟で、兵員の生命を優先するため兵器引渡しの選択を決断し、同日午後、兵器の引渡しを完了した。

十一月二日朝、禹城から北上した歩兵第三百三十一連隊に救出され、同隊に配属のまま、昭和二十年十一月三十日、平原を出発、十二月一日、濟南白馬山集結地に収容された。

下士官以下全員は第四十三軍軍法会議に出席、昭和二十年十二月上旬から下旬の間に取調べ（抗命、通敵）を受けた。

#### 平原県城奪回戦闘

昭和二十年十一月二日、禹城にいた税所中尉以下主力に対し、乗上少佐の指揮下に入る「重作命四号」が発令され、十一月二日平城奪回戦闘に参加し、同夕、県城奪回に成功、損害なし。

#### 王莊付近の戦闘

昭和二十年十一月二十三日、乗上少佐指揮の兵員二百三十七人は、十一月一日、平城奪回後同地を警備していた。乗上少佐は禹城拠点から張莊站、

林荘站の状況を電報により承知し、十一月二十三日早朝、大隊長以下二百三十七人は平原県城を出発し、張荘站、林荘站の救援並びに状況調査のため出発した。

十一月二十三日十時ころ林荘站付近にいた八路军の一部を駆逐しながら張荘站北方約二百メートルの米王荘に進出したが、敵兵力は過大であり、九時間交戦して包囲網を突破し、同日二十三日ごろ、状況不明のままむなしく平原県城を離脱した。損害は戦死二人。

#### 禹城拠点の失陥

昭和二十年十一月二十三日、王荘付近の戦闘後、禹城拠点に移動していた第十三連隊第二大隊約六百の兵士は、十二月二十九日以降、優勢な八路军（魯北軍区第一旅団、魯南軍区及び地方遊撃隊）約一万の包囲攻撃を受け、多大の損害を被り、禹城拠点は失陥した。また同じころ、晏城拠点も失陥した。

以上の状況により魯北地区の日本軍は徳県拠点

は第三百三十一連隊と独立警備隊のみとなり、徳県―済南間の守備兵は皆無となった。独立警備歩兵第四十六大隊の損耗状況は編成完結―終戦まで戦死十一人、生死不明一人、停戦から復員まで戦死十四人、生死不明六十七人であった。

#### 停戦から復員

独立警備第九旅団の独立警備歩兵第四十六大隊地域において、停戦命令と共に積極的な作戦行動は停止、黄河崖、平原、禹城の拠点に収縮し、主力を徳県に集結したのであるが、小兵力（中隊以下）の配備では八路军の積極的な攻勢に対し抑止力にならなかったため、さらに集結地区を高める必要から独立警備第九旅団独立警備歩兵第四十六大隊は全兵力を徳県に集結、同四十五大隊は臨清から禹城に集結、同四十四大隊は武定から平原に集結、昭和二十一年一月一日午前四時三十分、在徳県部隊及び在留邦人の一部（大部は乗船地までの距離の関係から天津集結）を同行し、津浦線西側地区を行軍し、昭和二十一年一月五日に、済南

經由白馬山集結地に到着した。

本移動間、二夜にわたり部隊を尾行した八路军の軍使が歩哨線に現れ部隊長に面接を求めたが拒否した。

昭和二十一年一月三日、天候曇天、積雪三センチ、厳寒であったが禹城付近において所在の八路军を排除し、十二月三十一日壊滅した第三百三十一連隊第二大隊の戦死者の遺体収容を実施した。

昭和二十一年一月七日、第九独立警備隊司令部を訪問し司令官石川閣下に大隊の終結を報告した。済南の街を歩くと「歡迎山東省主席何恩源閣下」

「歡迎司令李延年閣下」の張り紙が目立ち、また米軍のジープも散見された。当日承知した状況は以下の通りである。

一 国府軍の正規軍は未着であったが、国府軍とは名ばかり膠済線沿線の奥地に兵力を秘匿し、温存していた。張景月、徐申仲に率いられた雑軍五、六万及び地方豪族、揚民少等の傍系の雑軍であった。彼らは日本軍から警備

地区を引き継いだが各所で八路军から撃破されていた。

二 八路军の勢力は黄河北岸まで進出し、済南まで約四キロの地点まで迫ってきて、日本軍の兵器、弾薬を奪取するために包囲していた。米軍の進駐状況 済南に第九方面軍、青島に第六師団、天津に第三師団。

三 第四十三軍管区内の復員第一梯団は昭和二十年十二月二十五日、武装のまま済南を出発したが、途中八路军と交戦、負傷者を出した模様。

#### 武装解除

昭和二十一年一月十八日、大隊は国府軍より屈辱の武装解除を終了した。内地出發以来、生死を共にした兵器、馬匹と決別し、感慨無量であった。

#### 復員

青島集結の大隊は、昭和二十一年一月二十三日、白馬集結地を出発、二十日分の糧食を携行、青島乗船地に移動した。済南―王村の六十一キロは鉄

道（無蓋貨車）、王村から青島の二百三十キロは徒步行軍（鉄道破壊のため）となる。

膠済線沿線に集結していた日本軍の各部隊は既に青島に移動済みであり、沿線各地は八路军、国府雑軍が交錯して占拠し、昭和二十一年一月十五日、既に国共停戦協定により停戦の筈であったが、国共内戦が続行され、戦闘が終了するまで行軍を中止した日もあり、止む無く宿営北側で露営した沿線各地は匪賊化し、暴民の略奪、暴行等が頻発したが、八路军は行軍の梯団の各所に護衛兵を配置、行軍の安全に努めた。

昭和二十一年一月三十一日夕刻、大隊は宿営予定地の高密県高密（葉たばこ工場）に到着前に日没となり、夜陰に乗じて当地に駐屯していた国府雑軍の略奪に遭い、遺骨、復員書類等を確保したのみで、長路携行した被服、糧食、飯盒等にいたるまで略奪されるという大被害にあった。

厳寒の折であるが安全を優先し路上泊を選択すべきであった。

昭和二十一年二月一日夕、青島市郊外の「日軍集中営」に到着、同二月七日、米海軍のLSTに乗船、青島港を出帆、折からの玄界灘の荒海を難航し、同年二月十二日、長崎県佐世保港に上陸、元海軍の佐世保海兵団に宿泊、二月二十日、復員完結する。

私は先に述べたように、初年兵教育三カ月、濟南で無線教育で昭和二十年六月一杯まで受けた。

昭和二十年七月、平原の中隊の分遣隊が八路軍の攻勢を受け、大隊長指揮の下にかなり大掛かりな討伐作戦が行われ、無線も二局作るので初年兵二人も連れて行くとのことでしたから私も志願して戦闘に参加させてもらいました。古年兵一人、初年兵二人で一局、小型無線機を携行して参加しました。

粟畑、とうもろこし、落花生、西瓜畑が戦闘場所、早朝から夕方六時ごろで終了しました。そして中隊広場で大隊長の講評がありました。また中隊長、小隊長から戦果についての報告がありま

した。

私たちの無線機についても、古年兵が人員、機材、共に異常ありませんと報告しました。

北支の七月は暑く、三〇度は連日です。戦闘の合間の小休止は西瓜畑でした。布施中隊長が私の顔を覚えておられ、無線もここに来て西瓜を食べるようにと言ってくれました。この優しい小隊長も、その後の平原県崔家坊で壮烈な戦死をされました。終戦後の昭和二十年十月でした。

終戦の報は、正式ではなく、無線の下士官が皆に話してくれました。

その後昭和二十年十一月になり、徳県駅西の元軍人会館で部隊全員の演芸会が盛大に催され、その後鉄道警備戦で全員玉碎（平原県村莊）の税所中尉殿の「血煙荒神山」の吉良の仁吉役の芝居は見事でした。

徳県県城は煉瓦造りで高さ十五メートルぐらい、東西南北に門があり、上に二層の楼閣があり、徳県周辺は冬は寒く零下一五度ぐらいになり、夏は

暑く三五度になるという。

水田は少なく、粟畑が多い。現地民は粟粥が常食、西瓜は丸くなく横長の枕状で大きく、甘さは日本のものに比し少し劣る。

青州（益都）は瓜の産地、駅ホームで売っていると聞いた。徳県の南に臨清があり、北支綿花の集散地、ここより済南まで運河があり、この運河で済清に綿花を輸送していると言う。

復員後、郷里で精米所をやり、食料不足のときでもあり、毎日忙しく繁盛しました。昭和四十三年ごろからコロン写真工業社（本社は稲城）の山梨工場の役員、また山梨コロン（株）の取締役などを勤めました。

今でも折にふれて「北支派遣軍の歌」「大黄河の歌」を口ずさんでおります。

#### 北支派遣軍の歌

みいずのもとに、ますらおが

一死を誓ふみいくさに

堂々進む旗風に 威は中原を押しつつ



巖たり北支派遣軍

大黄河の歌

楊柳青く芽をふきて

頬にそよ吹く春の風

水の流れも緩やかに

春訪れし大黄河

万年初年兵の戦争体験記

福岡県 金子 久 男

福岡県三門郡三橋村磯島で大正十四年七月二十日出生、昭和四十（一九六五）年までここに住みました。

一歳の誕生日少し前、麻疹を病み、その高熱のため左目失明、「ヒーガラ（斜眼）」とか「メッチヨ（盲）」と笑われ、また悪口を言われて苛められました。私より年上や喧嘩の強い者が、私に対して苛めや悪口を言うことに気が付き、よし誰と喧嘩しても負けないようになれば笑い者にならずにすむと考えて、私は小身、非力でしたので、喧嘩道具を持つての喧嘩となり、怪我をする者も出る始末で、その凄さに恐れて、悪口を言う者は無くなりました。しかし三橋校開校以来の悪さ坊主になりました。

父母姉妹、家族四人が心配してくれました。父